ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　三匹が代わる代わる、途切れなく攻撃をしてくる。フシギソウは、それを必死に躱していた。それも、ピジョンのサポートがあってこそ。

「何か……何か無いかなっ？」

　そんな中、作戦を立てるために必死で頭をフル回転させているものの、未だ雅也はこの局面を何とかする一手を思いつかないでいた。

　そんな時、月明かりに、ルチャブルの足がキラリと光ったのが雅也の目に飛び込んでくる。

「……！　フシギソウ、あれだ！　ルチャブルの足に蔓の鞭！」

　その一言で、全てがフシギソウに伝わったのだろう。上手く狙いを定め、今まさに飛び蹴りをしてきたルチャブルの足に蔓を巻きつけた。そしてそのまま、ルチャブルを振り回し、もう一匹のルチャブルに投げつける。

　味方を飛ばされるとは思っていなかったのか、そのルチャブルは、飛んできた仲間を避けることが出来ず、そのまま固まって森の奥へと姿を消す。

　仲間を倒され、怒り狂ったのだろう。最後に残ったルチャブルが、地面を蹴ってフシギソウに突っ込んできた。このまま、勢いに任せてフシギソウをボコボコにするつもりだ。

　だが、それは叶わない。

　ルチャブルの背中から急に吹き付けた突風で、思わず前につんのめってしまったからである。白のピジョンが、ルチャブルに『追い風』の技を使ったのだ。但し、必要以上に強い風を起こして。『追い風』の技でスピードを上げるのは、慣れていないと以外と難しいのだ。

「雅也、今です！」

「うん！　フシギソウ、ベノムショック！」

　叫んだ瞬間、フシギソウの背中の赤い蕾から、紫色のエネルギー波が、うねりながらルチャブルに向かっていく。攻撃のスピードは遅いものの、ヨロヨロと立ち上がる最中だったルチャブルに、その攻撃を躱す術は無い。

　モロに『ベノムショック』を受けたルチャブルは、そのまま目を回しながら一回転し、ばたりと音を立てて倒れた。

「……」

　ホッと一息吐きかけた雅也は、フシギソウをジッと見ていた白に気が付く。その目は暗闇でよく見えない。

「……白、どうしたの？」

「……すごいですね」

　そう言って、白はピジョンとフシギソウを交互に見て、俯いた。飛んでいたピジョンが白の肩にとまり、悲しそうな声を上げる。

「何が？」

「……教えてくれませんか？」

　顔を上げると、白の目が濡れていた。

「どうやったら、そんな風に攻撃出来るんですか？」

「え？　え？」

　いきなりの事で、雅也は何と言っていいか分からない。思わず変な声を上げて、後ずさってしまった。

　そんな雅也を見て、白はハッとなる。

「……あ。ご、ごめんなさい！」

「う……ううん。気にしないで」

　慌てて目を擦る白。そんな白に、何と声をかけていいのか分からない雅也。

　二人は黙って、森の奥へと進む。

　だが、二人の間に会話は無い。彼等は無言で、来夢音の姿を探していた。

　どれくらい経っただろう。

「ねえ白」

　流石に会話が無いのが辛くなり、雅也はさっきから気になっていた事を聞いてみる。

「もしかして白って……誰かのサポートするのって嫌い？」

　恐る恐るそう言ってみたものの、白がビクッと肩を震わせて立ち止まったのを見て、聞かなきゃ良かったと後悔した。だが、今更遅いだろう。

　仕方がないので、自分も立ち止まって質問を続ける雅也。

「本当はもっと、攻めたいの？」

　白はその問に対し、少しの間無言を貫いていたが、やがてゆっくりと頷いた。

「僕は……執事ですから」

「……」

「僕って、いつも味方のサポートをしているだけでしょう？」

「ああ……そうだね。いつもサポートしているよね」

　今日のバトルも含め、学校でも白はバトルする時は、味方のポケモンをサポートしている所しか雅也は見たことが無い。

「でも、僕は執事です。いざとなったら、お嬢様のことをお守りしなきゃならないんです」

「う……うん」

　白の握り拳に込められる力が目に見えて増えていくのが雅也には分かった。その勢いは留まる所を知らず、寧ろさらに増えていっている。なんだか怖くて、雅也はその握り拳から目が離せなかった。

「そのためには、戦う力が……攻撃のための力が必要なんですよ。サポートだけじゃ、ダメなんです」

「そ……そんなことは……」

「どうしたら……どうしたら皆みたいに戦えるんですか？　どうやったら、お嬢様の前に立てますか？　どうやったら、強く……強くなれるんですか？」

「……白。ごめん。僕には分からないや」

「……そう、ですよね。ごめんなさい。変なこと言っちゃって」

　二人は顔を背ける。暫くして、二人は再び歩き始めた。

　白はああ言っていたが、雅也からすれば、白のサポートする力には才能があると思っている。それは自分にも、拓馬にも、良助にも、来夢音にも、そしてもしかしたら田島師匠にも無いものだろう。だから、決して白が弱いわけじゃ無いのだ。

　それ故か、雅也達は純粋に、白達の持つその能力が羨ましいと思っている。

　技術が必要だ。力を支えるための、白達が持つようなサポートの、味方を支援する力。今よりワンランク上の『強さ』を目指すために、『相手に、ジャックに勝つ』ために、それが今の彼等にはどうしても必要だった。

　力だけでは、限界がある。それだけじゃ、それ以上の力の前では絶対に勝てなくなってしまう。それが昨日自分が負けた理由であり、そして、それは昨日彼が、尊い犠牲の上に……『逃げる事が如何に大切なことか』以外の学んだ事だ。

　その事を白に伝えてやれば、それで良いのかもしれない。

　だが、出来なかった。それを伝える術を、雅也は持っていなかった。どう言葉にすれば白に伝わるのか、分からなかったのだ。

　それだけじゃ無い。そもそも彼等自身、学んだそれが、果たして正しい事なのかどうか、それすらも良く分かっていないのである。

　『強い』と言うことは、一体何なのか。『相手に勝つ』事。それが『強い』事だと言い切って良いのか。今求めている能力が身に付けば、それで『強くなった』と言えるのか。

こんなような事を漠然と、雅也達は考えていた。

「……白」

　それでも、やはり何か言うべきだろうと雅也は白に呼びかける。しかし返事は無い。

「白？」

　振り向くと、白の姿が無かった。周りを見たが、どこにもいない。唖然とする雅也。ツーっと流れた汗が、夜風のせいかちょっと冷たかった。一体どうしてこうなったのだろう？

　どうやら、白とはぐれてしまったようだ。